2022 年５月１日

「2021 年度大会アンケート」回答のまとめ

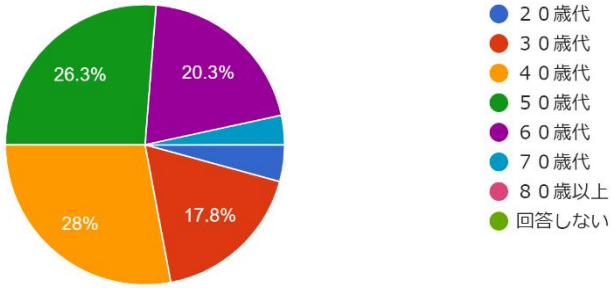
将来計画特別委員会

2021 年 10 月９日・10 日開催の第 73 回大会（愛知大学）に関して、同年 10 月半ばから翌年２月末日まで、本学会ホームページにおいて、「2021 年度大会アンケート」を行ったところ、118 名から貴重な回答を得た。以下、回答内容をまとめて整理し、ここに報告する。

なお、各グラフの基線は、いずれも時計の 3 時に位置する。

■回答者の年齢

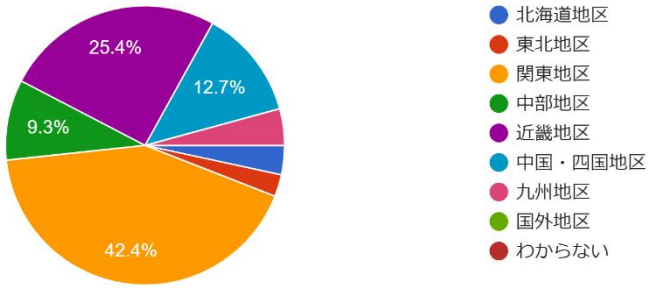
貴方の年齢をお選びください。



118 件の回答のうち、「20 歳代」５名、「30 歳代」21 名、「40 歳代」33 名、「50 歳代」31 名、「60 歳代」24 名、「70 歳代」４名であった。

■回答者の所属地区

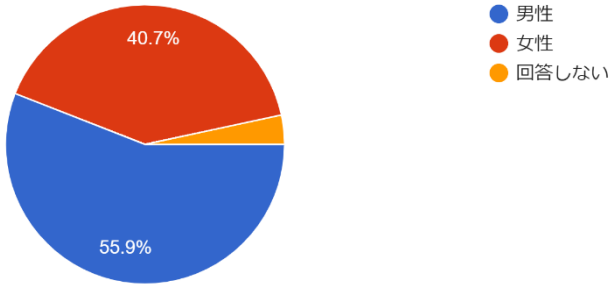
貴方の所属地区をお選びください。



118 件の回答のうち、「北海道地区」４名、「東北地区」３名、「関東地区」50 名、「中部地区」11 名、「近畿地区」30 名、「中国・四国地区」15 名、「九州地区」５名であった。

■回答者の性別

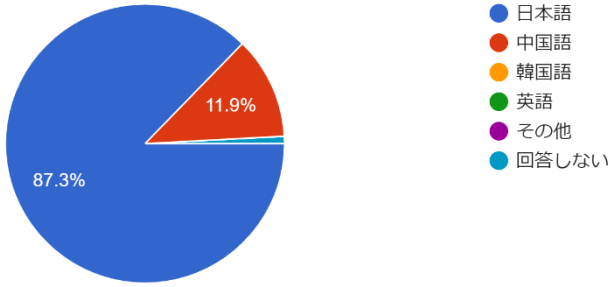
貴方の性別をお選びください。



118 件の回答のうち、「男性」66 名、「女性」48 名、「回答しない」４名であった。

■回答者の母語

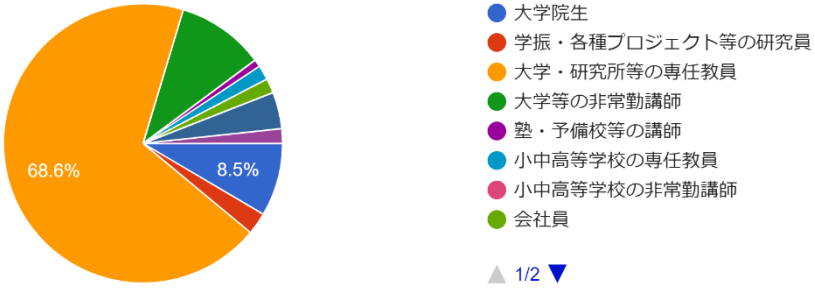
貴方の母語をお選びください。



118 件の回答のうち、「日本語」103 名、「中国語」14 名、「回答しない」１名であった。

■回答者の職業

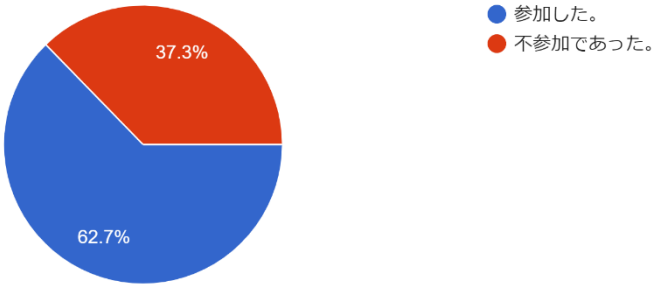
貴方のご職業をお選びください。



118 件の回答のうち、多い順に「大学・研究所等の専任教員」81 名、「大学等の非常勤講師」12 名、「大学院生」10 名、「学振・各種プロジェクト等の研究員」３名、「小中高等学校の専任教員」２名、「会社員」２名、「塾・予備校等の講師」１名、「その他」５名、「回答しない」２名であった。

■大会への参加・不参加について

10 月 9 ・10 日のオンライン開催大会に参加されましたか。



118 名の回答のうち、「参加」74 名、「不参加」44 名であった。

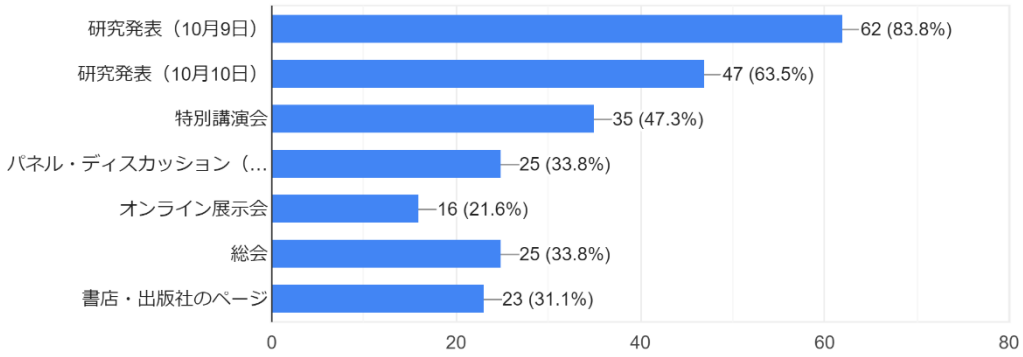
■不参加の理由について

不参加であった理由をお選びください。

44 件の回答のうち、多い順に「参加するつもりであったが、事前申し込みを失念してしまった」20 名（45.5%）、「当初から不参加の予定であった」17 名（38.6%）、「参加を試みたがアクセスできなかった」４名（9.1%）と続いた。参加を予定、もしくは希望したにもかかわらず、参加できなかった会員への何らかの対応が今後必要と思われる。

■参加プログラムについて

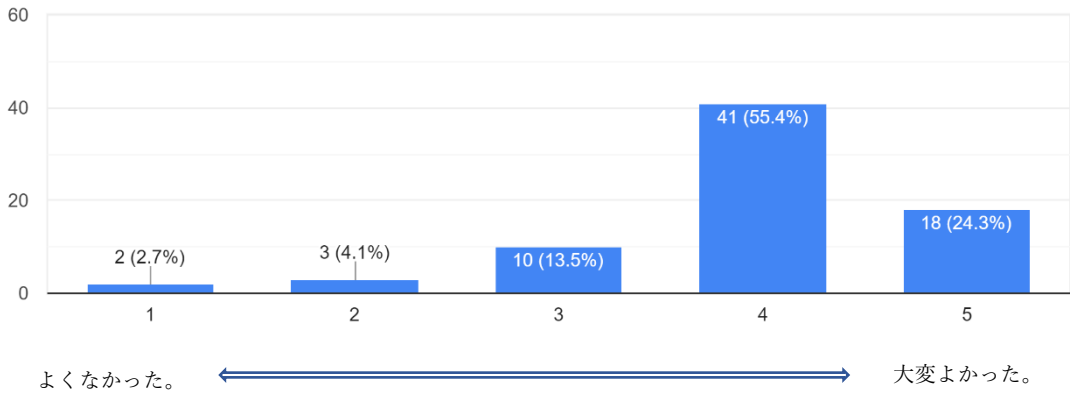
参加された方、そのプログラムをお選びください。複数回答可。



74 件の回答のうち、「研究発表（10 月 9 日）」62 名（83.8%）、「研究発表（10 月 10 日）」47 名（63.5%）、「特別講演会」35 名（47.3%）、「パネル・ディスカッション」25 名（33.8%）、「総会」25 名（33.8%）、「書店・出版社のページ」23 名（31.1%）、「オンライン展示会」16 名（21.6%）であった。

■オンライン大会の実施方法について

オンライン大会の実施方法（Zoom によるリアルタイム方式）は、いかがでしたか。次の中からお選びください。



74 件の回答のうち、多い順に［４］（よかった）41 名（55.4%）、［５］（大変よかった）18 名（24.3%）、［３］（どちらともいえない）10 名（13.5%）と続いた。［４］［５］をあわせると、59 名（79.7%）になり、約８割から肯定的な回答があった。

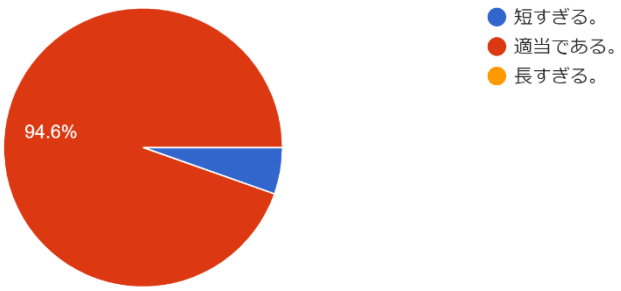
▼よかった点、改善の余地がある点（自由記述）

オンライン大会の実施方法（Zoom によるリアルタイム方式）について、よかった点、改善の余地がある点など自由にご記入ください。

「対面式の学会の雰囲気に近かった」「発表も質疑応答も臨場感があった」「リアルタイムで発表を聞けた点はよかった」「移動時間や経費がかからずありがたい」など、肯定的な回答が数多く見られた。一方で「一部、通信トラブルがあった」「発表者・司会者のネットが不安定になった場合の対応について改善の余地がある」など、緊急時対応への懸念や改善を求める意見があった。

■研究発表の時間について

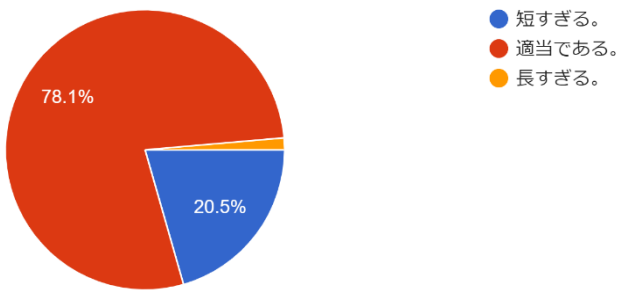
研究発表の時間（20 分間）についてはいかがでしたか。



74 件の回答のうち、「適当である」70 名（94.6%）、「短すぎる」４名（5.4%）であった。研究発表の時間（20 分間）については、適当であるという回答が大多数を占めた。

■質疑応答の時間について

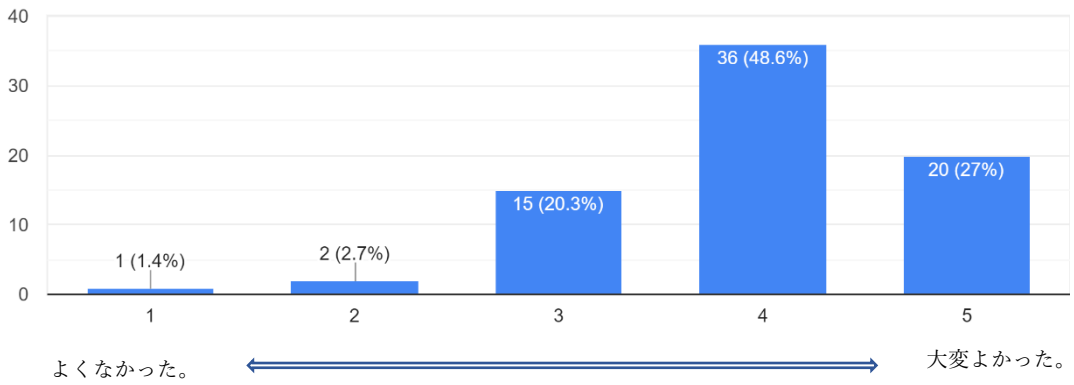
質疑応答の時間（10 分間）についてはいかがでしたか。



73 件の回答のうち、「適当である」57 名（78.1%）、「短すぎる」15 名（20.5%）、「長すぎる」１名（1.4%）であった。質疑応答の時間（10 分間）については、適当であるという回答が半数以上を占めた。

■司会のコメント、質疑応答の方法について

司会のコメント、及び質疑応答の方法についてはいかがでしたか。



74 件の回答のうち、多い順に［４］（よかった）36 名（48.6%）、［５］（大変よかった）20 名（27%）、［３］（どちらともいえない）15 名（20.3%）と続いた。［４］［５］をあわせると、56 名（75.6%）になり、大半から肯定的な回答があった。

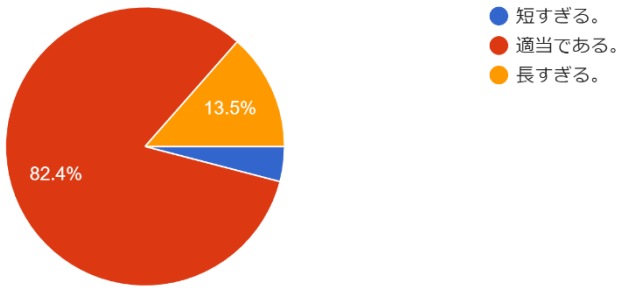
▼よかった点、改善の余地がある点（自由記述）

司会のコメント、及び質疑応答の方法について、よかった点、改善の余地がある点など自由にご記入ください。

「クリアな音声・画像で問題なく拝聴できてよかった。発話者のお顔を見て発言をうかがえるのも嬉しかった」「司会の先生方の進め方が統一されておりよかった」など、肯定的な回答が数多くあった。一方で「もう少し質疑応答を延長してもよい」「多くの参加者が質問できるよう、一人あたりの質問の数を制限した方がよい」「チャット欄への書き込みが認められれば、もっと活発な議論ができたかもしれない」など、改善を求める意見があった。また、司会担当者から「参加者の顔の見えない形で司会をするのは正直難しいと感じた」という回答もあった。

■発表と発表の間の休憩時間について

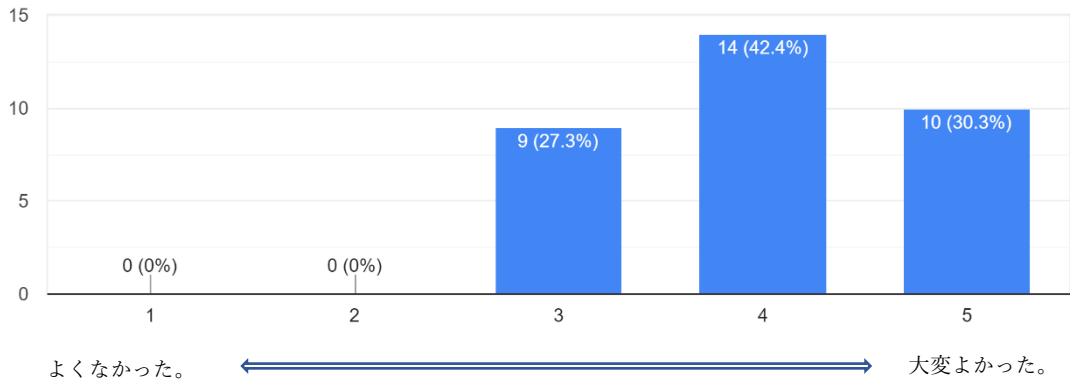
発表と発表の間の休憩時間（10 分間）についてはいかがでしたか。



74 件の回答のうち、「適当である」61 名（82.4%）、「長すぎる」10 名（13.5%）、「短すぎる」３名（4.1%）であった。発表と発表の間の休憩時間（10 分間）については、適当であるという回答が８割以上に及んだ。

■総会について

総会に参加された方におたずねします。総会の内容についてはいかがでしたか。



33 件の回答のうち、多い順に［４］（よかった）14 名（42.4%）、［５］（大変よかった）10 名（30.3%）、［３］（どちらともいえない） ９名（27.3%）と続いた。［４］［５］をあわせると、24 名（72.7%）になり、７割以上から肯定的な回答があった。

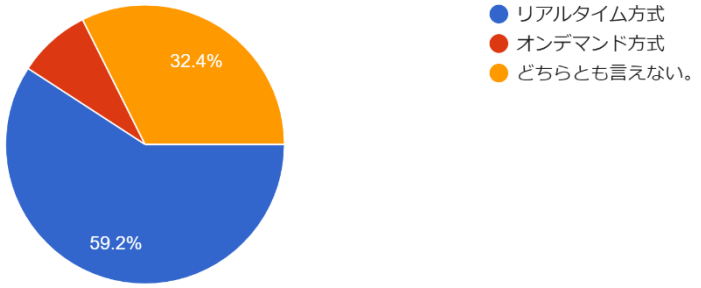
▼よかった点、改善の余地がある点（自由記述）

総会について、よかった点、改善の余地がある点など自由にご記入ください。

「オンライン方式であると、総会にも参加しやすい」という回答がある一方で、「学会賞受賞者の声は、昨年度のような録画で行われた方が聞きごたえのある内容となるので、よいと思った」という意見があった。

■リアルタイム方式とオンデマンド方式について

本年度のようなリアルタイム方式と、昨年度のようなオンデマンド方式では、いずれがよいと思われますか。



71 件の回答のうち、「リアルタイム方式がよい」42 名（59.2%）、「オンデマンド方式がよい」６名（8.5%）、「どちらともいえない」23 名（32.4%）であり、回答者の約６割が「リアルタイム方式」を希望した。

ちなみに、昨年度のアンケートでは「リアルタイム方式がよい」35.7%、「オンデマンド方式がよい」64.3%のように、ほぼ２対１の割合で「オンデマンド方式」を望む回答が多かったので、実施方式の希望については、この１年で大きく様変わりしたといえる。

▼理由（自由記述）

その理由を自由にご記入ください。

「リアルタイム方式がよい」理由としては、「会場での大会に近い雰囲気でよかった」「対面とほぼ同じ感覚で参加することができ、発表内容も入ってきやすかった」「臨場感がある」「一瞬ではあるが、発表者や司会者の姿や表情が映るので、学会らしさが出る」など、学会の雰囲気や臨場感を重んずる回答が多かった。また、「報告者に対して負担が少ない」「開催校と発表者に負担が少ない」など、発表者等の負担を考慮した意見も少なくなかった。さらに「発表者との交流がよりしやすいと思う」「初見のテーマに対して抱くストレスが少ない」という意見も見られた。

反対に「オンデマンド方式がよい」理由としては、「通信が不安定な場合に備えて、オンデマンドの方がよい」「オンデマンドであれば、技術トラブルは少ない。またより多くの発表を視聴することができる」など、通信トラブルの発生を懸念した意見が多かった。

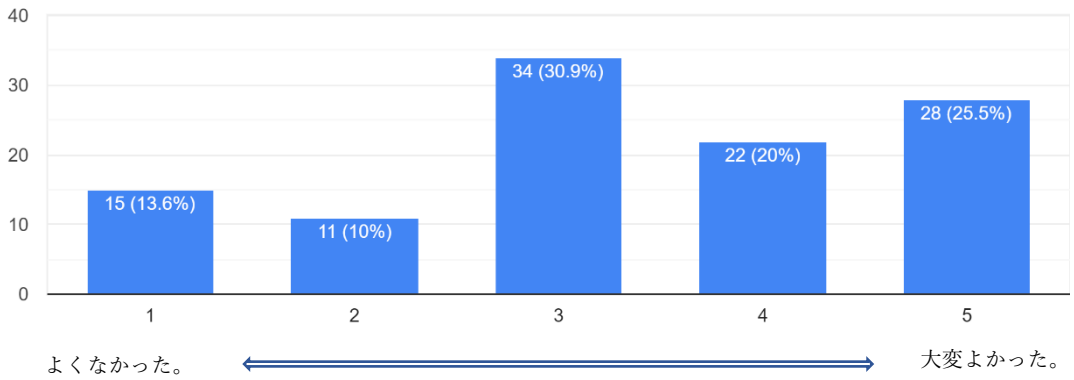
その一方で、「どちらともいえない」理由としては、「オンデマンド方式は、時間管理がしやすく、また聞く側も様々な意見を考えた上で提示でき、より活発な意見交換が期待できる。一方でリアルタイム方式は、発表を聞いた直後での臨場感を伴う意見交換ができ、また一つのまとまった時間内で議論が完結するので、スッキリしている印象を持った」「リアルタイムの方が発表を聞こうという気になる。オンデマンドは、よく考えられた質問と、それに対してうまくまとめられた回答になっており、質疑が充実していると感じた」「それぞれの良さがある。私のように子育て世代の人間や、用事で行けない人、遠方に行くまでの時間的余裕がない人にとっては、オンデマンドは非常にありがたい。しかしリアルタイムではないと得られないものも多い」など、両方の利点などを比較した回答が多く寄せられた。

その中で、「できたら録画して、参加できなかった人にはオンデマンド配信してほしい」といった要望や、「せめて発表は録画を流し、質疑応答のみリアルタイムにしてはどうか」「質疑応答のみ特定の時間に実施する併用方式も検討に値する」といった両方式を折衷するような提言があった。

■大会参加に関する連絡のしかたについて

今回の大会参加に関する連絡のしかた（大会要項に参加申込用のパスワードを記載し、9月 10 日～10 月 1 日 23 時の間にお申込みいただいた方には、Zoom の ID、パスワードを、大

会開催３日前までにメールで通知）はいかがでしたか。



110 件の回答のうち、多い順に［３］（どちらともいえない）34 名（30.4%）、［５］（大変よかった）28 名（25.5）％、［４］（よかった）22 名（20%）、［１］（よくなかった）15 名（13.6%）、［２］（あまりよくなかった）11 名（10%）と続いた。［３］が最も多かったものの、［４］［５］をあわせると、50 名（45.5%）に達したことから、おおむね肯定的に受け取られたといえる。その一方で、［１］［２］をあわせると、26 名（23.6%）に及んだことから、否定的な回答にも留意する必要がある（下記の「自由記述」参照）。

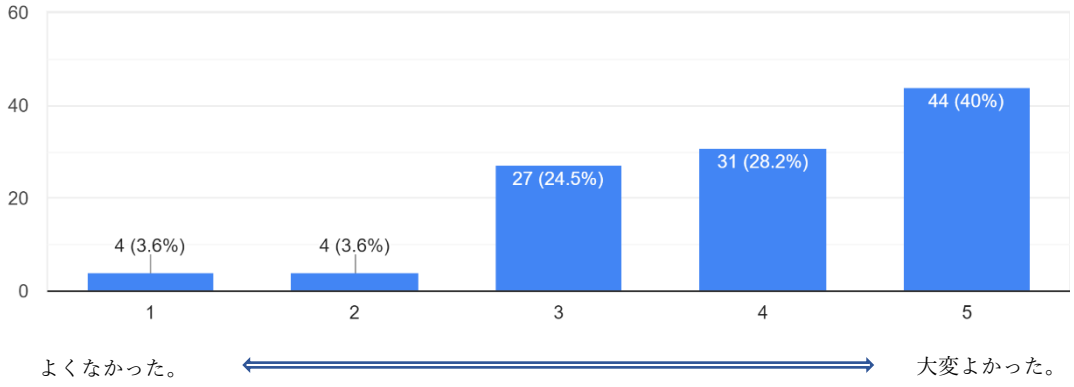
▼よかった点、改善の余地がある点（自由記述）

大会参加に関する連絡のしかたについて、よかった点、改善の余地がある点など自由にご記入ください。

肯定的な自由記述がなかったが、その一方で「大会要項の到着と同時に申込ができるようにしてほしかった」「大会要項に参加申込方法を目立つ形で記してほしかった」「リマインドメールを送ってほしかった」「当日参加も認めてほしかった」「通知メールが迷惑メールに振り分けられてしまい気づくのが遅れた」など、改善を求める意見が少なくなかった。

■研究発表資料の公開方法について

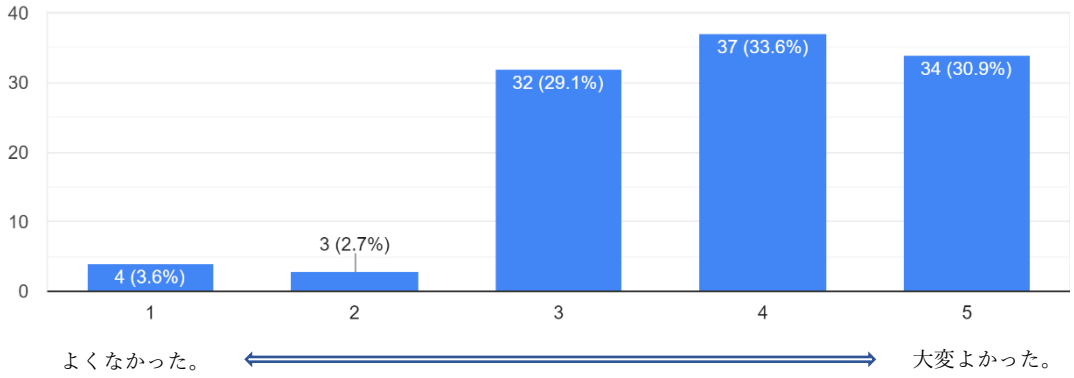
研究発表資料の公開方法（大会要項に大会特設サイトのパスワードを記載し、そこから各自でダウンロードしていただく）はいかがでしたか。



110 件の回答のうち、多い順に［５］（大変よかった）44 名（40%）、［４］（よかった）31 名（28.2%）、［３］（どちらともいえない）27 名（24.5%）と続いた。［４］［５］をあわせると、75 名（68.2%）となり、７割近くから肯定的な回答があった。

■研究発表資料の公開期間について

研究発表資料の公開期間（10 月４日～10 月 12 日）についてはいかがでしたか。



110 件の回答のうち、多い順に［４］（よかった）37 名（33.6%）、［５］（大変よかった）34 名（30.9%）、［３］（いずれともいえない）32 名（29.1%）と続いた。［４］［５］をあわせると、71 名（64.5%）となり、おおむね肯定的な回答が多かった。

▼よかった点、改善の余地がある点（自由記述）

研究発表資料の公開方法や公開期間について、よかった点、改善の余地がある点など自由にご記入ください。

「公開方法・公開期間ともに適切であった」「事前に資料を見ることができたのが、とてもよかった」「大会に参加できなくても、あるいは大会終了後でも、発表内容を知ることができるのは大変よいと思う。今後も続けてほしい」など、肯定的な回答が多かった。一方で「公開期間はもう少し長くてもよかった」「資料はもう少し長め、早めに公開してほしい」「資料の一括ダウンロードができるようにしてほしかった」など、改善を求める意見もあった。

■次世代シンポジウムの実態形態について（自由記述）

昨年度の第 72 回大会では次世代シンポジウムの実施を見送りましたが、本年度は次世代シンポジウムとしてパネル・ディスカッションを公募の上で実施しました。次世代シンポジウムの実施形態について、ご意見があれば自由にご記入ください。

「試行錯誤する新しいパートを設定するのは全て賛成です。従来の発表は形式も含めて確保しつつ、チャレンジもしてほしい」「オンライン開催に伴う制約や問題を除けば、進行方法や内容についてよかったと思う」「面白かった。パネル・ディスカッションは割合をもっと増やしてもよいと思う」「継続されることに期待する」のように、高い評価が得られた。一方で「パネル全員が会員であるのは企画を立てるのにハードルが高い。歴史や美術の研究者をまじえた企画を希望する」「無理やりの実施はそろそろ限界ではないか。むしろ Zoom による展示会説明を入れてほしい」といった意見もあった。

■日本中國學會全般について（自由記述）

日本中國學會全般について、ご意見やご提言などがありましたら、自由にご記入ください。

「大変な状況の中、学会をつつがなく開催してくださったことに感謝申し上げる」のように、大会開催校や関係者に対する謝辞が多く寄せられた。

また、大会の開催方法について、「対面方式に戻し、遠方の方にはオンライン参加可能というように、今後はハイブリッド方式を採用していくと、主催者側の苦労は多くなるが、可能性が広がると思う」「次年度以降の大会でも、オンライン方式（もしくは対面・オンラインのハイブリッド型）を継続してよいかと思う。地方在住の人間にとっては、対面方式よりオンライン方式の学会の方が気軽に参加しやすく、利点が大きい」「対面での大会再開を望んでいる。若手にとって、学会は年配の先生方、特にリタイアされた名誉教授等と接する貴重な機会である」という意見があった。

加えて、入会に関して「入会が年二度に限られているのを、もう少し増やしていただきたい」という意見があった。